

A. L. French: *Shakespeare and the Critics*

富原芳彰

本書の著者については私はよく知らない。ただ、シェイクスピアについて考える最初のきっかけを与えてくれたのは A. P. Rossiter (ケンブリッジの Jesus College の Fellow であった人で、すでに故人) であったとして、このケンブリッジの演劇学者に本書の著者が謝辞を呈していることから察して、おそらくこの著者はケンブリッジ出身の比較的若い研究者ではあるまいかと思うだけである。そのことはともかく、本書には、新進気鋭の学者によく見られる一種の覇気が感じられる。

今日、シェイクスピアの戯曲を論ずる人たちは、一般に、それらのいずれもが常に完全な首尾一貫性を持ち、その中に欠陥や混乱のまったくないものとして扱っているとこの著者は考える。シェイクスピアの戯曲の中に不可解な箇所があったり、作品全体を統一的に説明できないような場合には、もっぱら、読者の側に読みのあやまりや不徹底があるとされるのが、最近のシェイクスピア研究者たち

の間に一般にみられる傾向であるところの著者は考える。前後の辻褄のよく合わないところにもかれらは作者シェイクスピアの隠された深い意図を読みとろうとして苦心しているが、しかし、シェイクスピアの戯曲にそのような態度で臨むことははたして正しいか、というのが本書の著者の基本的な疑問である。はたして、シェイクスピアは、彼の戯曲のいずれにおいても、破綻や挫折や矛盾を示さず、彼の作品はそれのどの部分に対してもある統一的な解釈に立って整合的な説明を与えうるようなものかどうか。シェイクスピアの戯曲を論ずる場合にそれのどの部分をも正当化でき、それのどの部分に対しても前後矛盾しない説明を与えるものと考えている今日の批評家たちは、かれらのその事前の想定 (assumption) そのものにおいて誤っているのではないかという疑問が、この著者が本書で彼の議論を展開する出発点になっている。

ここで、本書における著者の真意を誤解しないようにする必要がある。著者はシェイクスピアのアラ探しをして、シェイクスピアをけなそうとしているのではない。彼が批判しているのは、最近のシェイクスピアの批評家たちであって、シェイクスピアそのものではない。本書の著者が求めているのは、シェイクスピアをあらゆる事前の想定から解放された眼で見るわれわれの自由の確保である。

いっさいの事前の想定から解放された眼でシェイクスピアを見るべきことを主張する著者は、シェイクスピアのいわゆる背景の研究ということにも危険がひそんでいると考える。エリザベス朝の神学者や政治家の言説によってシェイクスピアを説明しようとすることは、かれらにシェイクスピアを読んでもらうこと、すなわち、シェイクスピアをかれらと同列に置くことになる。これは明らかに危険なことであるとこの著者は考える。むろん、この著

者も背景の研究を無用としているのではない。「利用できる情報があるときそれを無視する言訳は立たないが、それと等しく、情報を怠惰に愚かに適用する言訳も立たない」(p. 7)と彼は言うのである。たとえば、シェイクスピアのころ、自殺は教会によって罪とされていたことは周知の事実である。自殺者を正規の墓地に埋葬することを許さず、四辻に埋めてごろ石や瓦礫で覆うという常習をイギリス議会在議院が廃止したのは1823年のことにすぎない。しかし、シェイクスピアのローマ史劇を見ると、そこには自殺に対する「迷信的恐怖」はすこしも見られず、反対にそれはしばしば名譽ある行為とされている(ブルータス、キャシアス; アンTONY)。他方、『ハムレット』にはオフィーリアの「疑わしい死」があり、教会は彼女を墓地に埋葬することをしぶしぶ許しはするものの、粗末な儀式しか与えない。『ロミオとジュリエット』においては、場面はカトリック国イタリアに設定されており、神父ロレンスはフランシスコ派の僧侶であり、ジュリエットがこの神父を二度訪れるときの表向き理由は、いずれも「ごんげ」を聴いてもらうためということになっている。このような状況においては、自殺は常識的には、とうぜん罪とされなければならないはずであるが、このことについての神父の見解は流動的できわめてあいまいであり、この劇の最後においてロミオとジュリエットの黄金の像を建立することが提議されても、誰ひとり反対を唱える人はいない。シェイクスピアには「背景」の枠などを寄せつけないものがある。彼は当時の人びとによって一般に受け入れられていた諸観念を利用できるときには利用した。しかし、けっしてそれらに捉われることはなかった。彼は自由に感じ、自由に考えた。本書の著者がシェイクスピア批評における「歴史主義」(‘historicism’)を批判し、それに伴

う危険を警告し、それを今日われわれがもっとも警戒すべき「事前の想定」としてとりあげたのは、それが最近のシェイクスピア批評に広く浸透していて、今日もっとも強い影響力を持っていると思われる諸書にそのことがみられるとこの著者は考えているからである。(数年前からシェイクスピア批評における歴史主義は多少衰退の傾向にあることは本書の著者も気づいている。)

『以尺報尺』におけるクローディオとジュリエッタとの肉体関係は、シェイクスピアの当時法律上認められていた「結婚の予約」(*sponsalia per verba de praesenti*, あるいは *precontract*)に基づいて結ばれたもので、それは合法的であったと、「アーデン版」の編者その他が解説している。しかし、この劇をよく調べてみると、劇中でその主張をしているのは当事者のうちのクローディオだけで、ジュリエッタも、またイザベラも、その他誰も、そのことを言っていないことがわかるとこの著者は言う。クローディオに死刑を迫る法律が、その法律のもっともきびしい適用を受けべき売春業者たちにはむしろ寛大な顔を見せ、クローディオにだけ苛酷に迫ることなどを含めて、この劇には説明のつかないことが多いが、上述のような背景的知識をここに持ち込むことは、この劇の解明に役立つどころか、それをますますわからないものにしてしまうと本書の著者はみる。

しかし、この著者は、すぐにつづけて、背景的知識が人を誤解に導く危険もあるということ、われわれがそれをまったく無視してやっつけていけるということを意味するものではないと念を押している。背景的知識は無用であるときめてかかるのも一つの「事前の想定」であり、それもワナの一つである。要するに、本書の著者が言おうとしていることは、シェイクスピアに対する場合、われわれはどんな

ことも事前に想定してかかってはならぬ、というに尽きる(“Indeed it is my whole point that we mustn't start by assuming anything at all.” [p. 21]).

「背景」についての事前想定は、シェイクスピアについての諸々の一般的事前想定の特例にすぎない。しかし、本書の著者はそれを重視した。そして彼がそれ以上にも重視しているのは、シェイクスピアの戯曲は完全に辻褄が合っている、あるいは辻褄を合わせるができるときめてかかる事前想定である。それならば、著者がそうすべきであると主張するようにいっさいの事前の想定を排してシェイクスピアをみるとどうなるのか。著者はシェイクスピアの悲劇のうちの4編——『ハムレット』、『オセロー』、『リア王』、『アントニーとクレオパトラ』をとりあげて(なぜこの4編がとりあげられたのか、その理由は述べられていない)、著者の主張に基づくそれらの作品の考察を行なっている。

著者によるこの4編の劇の詳細な再吟味が本書の本体をなしている。著者によるこれらの劇の再吟味は、これらの劇のテキストをさながら法律の条文でも読むかのごとくにする一種の厳格さをもって行なわれている。この著者にはじつに強靱なリテラリズムがある。この著者がしきりに劇の「データ」(data)ということを行い、「証拠」(evidence)を検討せよと言う、その口吻のはしばしにも、彼の基本的姿勢がうかがわれる。テキストの文字にその証拠を見出せないこと、あるいはテキストのどこかの一カ所とでも衝突する解釈は、「事前の想定」が生み出した虚妄であり、正当性を欠くものとされる。ここにあるのは、要するに、実証主義である。

『ハムレット』の場合、少なくとも三つのまったく矛盾する解釈が今日行なわれているとこの著者は言う。一つの解釈によると、ク

ローディアスは健全な男であり、ハムレットがデンマーク国で腐っている何かである(ウィルソン・ナイト)。第二の解釈によると、クローディアスと彼の宮廷が腐っていて、ハムレットは、当初は健全であったが、彼が滅ぼそうとした悪にかえって感染してしまったとされる(L. C. ナイツ, H. D. F. キトー)。もう一つの解釈によると、ハムレットは真実好ましい王子であり、事実上彼には一点の非もないとされる(ドーヴァ・ウィルソン)。ブラッドリーもだいたいはこの第三の解釈の線に沿っているが、ハムレットにはいやらしいところもあるとみて、ウィルソンのようにト書きをいじくる(主として、II. ii. 159におけるハムレットの「早い登場」と、劇中劇の場面全体)「惨憺たる」必要から免がれている。このような事態は本書の著者には辛抱ができない。そこで彼はこの劇のテキストに即した実証的吟味をはじめのわけであるが、そのこまかな道筋をいまいちいち辿っている余裕はない。彼の吟味の結果だけを大まかに言えば、『ハムレット』という劇は説明のつかないことや肝心な点の不明(たとえば、クローディアスとガートルードの結婚は近親相姦かどうかということなど)に満ちた、何ともわけのわからない作品であるということになる。本書の著者は、「あいまい」ということが、たとえそれがエンブソン流のものであっても、嫌いのようなものである。彼は『ハムレット』を芸術上の失敗作とみた J. M. ロバートソンや T. S. エリオットにむしろ共感を覚えている。この著者が彼の『ハムレット』論の最後に書いている言葉、「『ハムレット』は驚くほど豊かな劇である……しかしその豊かさはその首尾の乱れ(incoherence)の結果である。[そこにある]さまざまな見地はけっして一つの中心的、要約的見地から総合的に理解されるものではない。……その人気

「もおそらくそこからきている」という言葉は、私には、いささか木に竹をついだような趣が感じられる。

本書の著者は、たとえばクローディアスというものを考える場合に、劇のはじめの方のクローディアスに劇のあとの方のクローディアスを重ね合わせてみることの誤りというようなことを言っているが、彼のそういう考えの方がむしろまちがっているのではないか。文学作品（シェイクスピアの劇もその中に含まれる）は、それが読まれるとき、発端から終結へと単に直線的に辿られているものではない。前から後へ、後から前へという相互的な交流や干渉が無数に、弁証法的に繰り返されてそのことは行なわれるのである。文学作品は数式とはちがうのである、などとこの著者にむかって言っては失礼に当たるかもしれないけれども、本書を読んでいると、何となくそうもつぶやきたくなる。

この著者が、彼のやり方で『オセロー』を再吟味したときにあらわれてきた主要なことは、デズデモナが夫の公的立場というものをまったく理解しない悪妻であるということ、III. iii（いわゆる「誘いの場」）以後のオセローは言うこともすることもまったく支離滅裂になる——まったくの狂人となって、正常な人間による真の理解も共感も拒むものになるということである。『リア王』においては、本書の著者の再吟味によれば、コーディーリアは高慢で短気な女（まさにリア王の娘）であり、リアはゴネリルやリーガンによって嵐の荒野に追い出されたのではなく、彼の方で勝手にそこへ出て行ったのであり（著者はこの部分ではゴネリルやリーガンの言い分にむしろ理があるとす）、とくに注目すべきことだが、リアの無理解、無同情の本性は劇のはじめから終りまで変わらず、リアに「救済」があるとみる解釈（“redemptivist

view”）は批評家たちの妄想となる。本書の著者によれば、リアの最後の姿は、まだ若い彼の娘コーディーリアを伴侶としてこれから生きようとする身勝手（リアにはコーディーリアはたのしい伴侶かもしれないが、コーディーリアにとっては彼のごとき老人の伴侶は好ましくないということを彼は考えない）を残したまま、どなり散らしていた間はとにかく彼が持っていた逞ましい生命力をほとんど喪失して、衰弱しきったみじめな老人の姿でしかない。『アントニーとクレオパトラ』は、この著者によると、むしろ笑いを誘うところの多い（“funny”）芝居であって、これをシェイクスピアの『トリスタンとイゾルデ』と考えたりするのは、批評家がこの作品の直前に並んでいる悲劇の作品をみた情性でシェイクスピアはここでも同種のことをしようとしているときめてかかったことから生じた誤解である。この劇は、アントニーとクレオパトラが言ったり言われたりしている言葉とわれわれがそこで目に見る現実との齟齬にポイントのある「喜劇」であるというのが、本書の著者がこの劇を彼流に再吟味した結果の要約である。

本書の著者 A. L. フレンチは、われわれがシェイクスピアにむかう場合に、いっさいの「事前想定」から解放されていなければならないと主張した。その主張そのものは、シェイクスピアに対する場合にかぎらず、およそ学問とか研究とか呼ばれる人間活動のいずこにおいても正しい主張であると言わなければならないし、それこそわかりきった話である。ただ、本書の著者は、これを言うのはちょっとおとな気ない気もするが、いっさいの事前想定を排すると言いながら、みずからは、テキストの字句によって実証されないことはすべて作品の中に存在しないという偏狭な事前想定に陥っている。彼が行なっているテキ

ストによる実証ということについても、前に述べたとおり、彼のやり方そのものが文学作品の性質についての正しい認識の上に立って行なわれているとは言えない。したがって、彼の議論は、議論の進め方そのものに疑問がある。

本書の著者は、シェイクスピアそのものよりはむしろその批評家たちを批判しているとは言えるけれども、やはり、間接的には、シェイクスピアそのものが批評されている。著者は、シェイクスピア劇に多くの理不尽をみた。それでもなおかつ彼はシェイクスピアを尊敬しているらしいが、その間の説明は本書には何もない。もし本書の著者が、本書を書いた後にもなおシェイクスピアへの尊敬を失わないでいるのであるならば、その理由こそ、彼がわれわれに告げるべきもっとも肝要なことであった。

A. L. French: *Shakespeare and the Critics*. Cambridge University Press, 1972. 239 pp.